

「ご当地検定」のタイプ

「ご当地検定」にもいくつかのタイプがある。「ご当地検定」を分析していくにあたって、最初にそのタイプを整理してみたい。

分類の仕方についてはいくつかの視点が考えられる。

たとえば、その検定が何を対象としているかによって、地域の歴史、自然、文化、観光、産業など地域資源を総合的に扱うタイプ、ある地域の特定の地域資源（明石のタコ、呼子のイカ、香住のカニなど）に絞って対象とするタイプ、地域横断的に地域資源を対象とするタイプといった分類の仕方が考えられるだろう。また、実施の仕方から、地域興しイベントなどの中で単発に実施される「イベント型」と、地域活性化の一手法として継続的に実施する「定着型」といった分類も考えられる⁶。

それらはいずれも「ご当地検定」を考える上で不可欠な分類であるが、本稿では検討の視角として、検定を行う目的から分類することを中心に考える。すなわち本稿の問題意識である「ご当地検定」の地域振興への寄与と、その課題や可能性を考える場合、「ご当地検定」を何の目的のために実施し、その中でどのように位置付けているかという視点が不可欠と考えるからである。

ここで着目したのがそれぞれの「ご当地検定」の目的に関して記述した文章である（図表1～3参照）。必ずしも厳密な分析ではないが、これらの文章に目を通すと、それらの中に大きく2つのキーワードがあることに気づく。

ひとつは、おもに観光や食にかかわる分野での「人材の育成」、「もてなしの質の向上」といった言葉である。これらは、言い換えるならば「人材育成」を目的するものとしてよいだろう。

もうひとつは「地域のことを知る」、「地域の『通』になる」、「町の魅力を再確認する」、「理解を深めること」といった言葉にみられる「地域再発見・再評価」にかかわる目的である。近年各地で「地域学」という活動が展開されているが、「地域学」とは、「奄美学」や「長崎学」といったように、特定の地域の自然や文化を学ぶことを通じて地域づ

くりへの動機づけを図ることを目的に、地域住民など多様な主体による生涯学習のスタイルで行っている一連の活動のことである⁷。その意味では、このタイプは「地域学」を志向しているといえよう。

そして、もちろん「地域を知る」ことと、「もてなしの質を高める」ことの両者を併せ持つタイプもある。

そこで本稿では、どういった目的を重視するかという観点で、第1のタイプを「人材育成型」、第2のタイプを「地域学型」、そして両者を併せ持つタイプを「総合型」と類型化してみることにする。以下、それぞれのタイプについてみていく。

①人材育成型

第1の「人材育成型」は、観光などの人材育成を通じて地域産業の活性化を図ろうとする産業政策的な方向性を持つ検定のタイプである。「ご当地検定」の草分けといわれるのが、「人材育成型」の「東京シティガイド検定」であるが、東京のことを深く専門的に紹介することができる人材の育成を目的とする検定であった。「検定」がそもそも能力開発のツールであることを考えれば、「ご当地検定」が観光にかかわる人材育成からスタートしたことも理解できる。そのほか観光人材の能力向上を目指した「札幌シティガイド検定（2004年度 図表1）」や「九州観光マスター検定（2005年度 図表1）」、地域の食にかかわる知識のレベルを問う「北海道フードマイスター認定（2005年度 図表1）」などが代表的な事例である。後述の「総合型」との違いはあまり明確ではないものの、「松山観光文化コンシェルジュ検定（2005年度 図表1）」や「四国観光検定（2006年度 図表2）」も「人材育成型」に含めて考えてもよいであろう。

これらの「ご当地検定」は、いずれも事業規模が比較的大きく、合格後も能力向上や就職・起業のフォローアップに注力しているところに特徴がある。たとえば、「北海道フードマイスター認定」は希望者にマイスター資格者を優先的に雇用する求人先の情報提供や、開業希望者への各種の支援制度の紹介など、同地域の基幹産業である「食」に

6 日本商工会議所からのヒアリングによる。

7 根本〔2005〕を参照。なお、「地域学」には海外の地域を総合的に研究する学問を指す場合もあるが、その点は今回は触れない。